

GAMERA ガメラ

AS365

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1978年、南太平洋の島にアメリカとソ連のパイロットが不時着した。

それから40年後、アメリカが南太平洋上で発見した島に学者と軍の調査チームが派遣された。

しかし、人間はその島では食物連鎖の最下層の存在だった。

キングコングをカメラに置き換えた話です。

誤字脱字等も多々あると思います、ご了承ください。

目次

西と東のパイロット	1
帰国間近の軍隊	7
2人の研究者	15
再会の2組	21
到着	28
全滅	46
尋問	61
襲い掛かる島	68
湖畔の死闘	83
ガメラ	91
ギャオス	98
島の夜	107

合流	111
ギャオス襲撃	118
決裂する一行	131
美女と怪獣	137
ベックウイズの最期	142
ガメラVSギャオス	153

西と東のパイロット

1979年

南太平洋

「……………あああああ あ あ あ ああああああ

……………!!」

ヒューードン!!!

南太平洋のとある島にアメリカ軍のA-7が墜落した、その直後パラシュートで脱出したパイロットが砂浜に着地した。

「はあはあ」

ヒューーーーーー

「!」

そして彼の上をY a k—38が火を吹きながら墜ちて行った。

カチャ

バツ

ザッザッザッザッザッ

パイロットはパラシュートを外し、Y a k—38が墜ちた方へ走って行った。
パイロットが着くとY a k—38が墜落していた。

「レッドスター………ソ連軍か」

アメリカのパイロットは機体の残骸に書かれたレッドスターからソビエト連邦軍機だとわかった。

その手間にソ連のパイロットがパラシュートで着地した。

「！」

ソ連のパイロットもアメリカのパイロットに気付いた。

カチャ

アメリカのパイロットはS & a m p ; W M 39をソ連のパイロットに向けた。

ダン!!!ダン!!!ダン!!!ダン!!!ダン!!!ダン!!!

カチカチカチ

「……………」

アメリカのパイロットはソ連のパイロットに向け全弾撃つたが射撃は得意ではないのか掠りもしなかった。

「っ！」

カチャ

バツ！

カチャ

ソ連のパイロットもパラシュートを外し、アメリカのパイロットにマカロフを向けた。

ダン!!!

バシユツ！

ソ連のパイロットも発砲した。

弾は当たりこそしなかったが、アメリカのパイロットの直ぐ近くに当たり、アメリカのパイロットは自分より正確な射撃をしたソ連のパイロットに脅威を感じ逃亡した。

ザツザツザツザツザツ

ダン!!!

カチカチカチ

ソ連のパイロットはアメリカのパイロットを追撃し発砲したが、マカロフはジャムを起こした。

ザツザツザツザツザツ

そして二人は島のジャングルに入って行き、

ジャングルの中で生死を掛けた追跡劇を行っていた。

ガサガサガサガサ

「!」

ザツ

アメリカのパイロットはジャングルを抜けたが、その先は断崖絶壁だった。

ザツ

「!」

シャキン

ソ連のパイロットはアメリカのパイロットに追い付き、故障した拳銃の替わりにシャシユカを脱いだ。

「っ!」

ブン!

ブン!

ソ連のパイロットはシャシユカでアメリカのパイロットに斬りかかり、アメリカのパイロットをそれを回避した。

サツ

「!」

ガツ

アメリカのパイロットを突き出されたシャシユカの刃を掴み止めた。

シユー

「あ、あ、あ、あ！」

ソ連のパイロットはシャシユカを押し出し手の平を切りながら進み、アメリカのパイロットは激痛に悲鳴を上げた。

「ぬう！」

ガツガツ

「あつ！」

キン！

アメリカのパイロットはソ連のパイロットを片手で殴り倒し、ソ連のパイロットはシャシユカを落とした。

「ぬあ！」

「でゅい！」

二人は取っ組み合い、ソ連のパイロットはアメリカのパイロットを押し倒し。ナイフでアメリカのパイロットを刺し殺そうとした。

「ぐううう」

「ぬううう」

アメリカのパイロットはナイフを全力で抑え、ソ連のパイロットは全力で押した。

ゴゴゴゴゴゴゴ

「!?!」

その二人の居る崖の下からとてつもない大きさの影が出て来て、二人は突然の事に争いを止めた。

二人が見た影は巨大な亀だった。

帰国間近の軍隊

2018年

アメリカ合衆国 ワシントンDC

ホワイトハウス

その日、アメリカの特務研究機関、モナークの研究者ランダと助手の黒人研究者ブルックは、ホワイトハウス地下会議室で大統領と上院議長、それに国防長官を交え、衛星写真をスクリーンに写し、話し合っていた。

「では、その島に本当に居るのかね？」

「ええきつと」

「ランダわかっているのか？君達の研究機関モナークは解散のリストに真つ先に載っているんだ。私達も空想に付き合っている程暇じゃないんだよ」

ランダに対して上院議長はランダ達を煙たがるように突き放した。

「ですがこの島には手付かずの地下資源が埋蔵されてる可能性もあります」

ブルックの言葉を聞き大統領たちは喉を噎らせた。

今アメリカは経済的に厳しい状況にあり、手付かずの地下資源はかなり魅力的だっ

た。

「……………わかった、島の調査を認めよう」

「ありがとうございます！大統領！」

「では大統領もう一つ頼みが」

「何だ？」

ランダは大統領にもう一つの提案を言った。

「軍の護衛を着けて下さい」

フィリピン共和国

フィリピンのジャングルではウツドランド迷彩に身を包んだ一団が居た。

「こちらスパロー、目的地到着、送れ」

彼らの正体はアメリカ軍で構成された第17統合作戦部隊、通称ブラックタイガーと呼ばれる、ヘリコプター部隊と歩兵部隊で混成されたタスクフォースで、現在彼らはフィリピンで反米テロ組織幹部の暗殺作戦を遂行中だった。

『狙撃は可能か？』

狙撃手のニック・モートン少尉はサブレッサーを装着したM14 DMRのスコップを覗いて、ターゲットのテロ組織の幹部を捕捉した。

「こちらニツク。ターゲットを捕捉、若い女としけ混んでますよ」

『よし、そのままいかせてやれ』

ニツクは深く深呼吸し息を吐ききり、息を止め引き金をギリギリまで引き、そして最終ポジションについた。

「……………」

キユウウウウウ

「?」

キユウウウウ

ニツク少尉は引き金を引く寸前で、上空から何か音が聞こえた様な気がし空を見ると、遠くの空に回転する円盤のような物が飛んでるのが見えたが直ぐに雲の中に消えて行った。

「どうした?」

「いや、何でもない」

ニツク少尉は再びスコープを覗き、再度照準を合わせた。

カシユン!

ニツク少尉が引き金を引くと、サブレッツサーによって鈍くなった銃声があった。

「ぎやあああああ!!」

テロ組織の拠点から幹部が連れ込んだ女の悲鳴が聞こえて来た。

「ターゲット排除、撤収する」

『了解、合流地点で落ち合おう』

「了解……」（さつき飛んで行ったのは……いつたい……）

フィリピン共和国

クラーク空軍基地

作戦を終了したブラックタイガーはクラーク空軍基地に戻り、後はアメリカ本国への帰還を待っただけだった。

同隊所属のコール大尉、ミルズ一等准尉、スリフコー一等准尉、レニス二等軍曹はポーカーをしながら基地最後の日を満喫して居た。

「なあミルズ、恋人には何通手紙を出したんだ？」

「10通位だな」

「それで何通返事が来たんだ？」

「そうだな、3 4通位かな？」

「ひでえママだな」

「っておい！言うなよコール！」

「ハハハハ！」

「処で姉御は？ 昼から見てねえが？」

「チエキータは帰国の用意してるよ」

「姉御なあゝ美人なんだからもうちつとおしとやかだつたらよかつたんだけどなあ」

「おい」

「この前なんか奇襲して来たゲリラをナイフ一本で皆殺しだぜ？ 化け物かよ」

「おい」

「なんだよスリフコ」

「あなたはナイフの扱い上手くなったの？」

「げえ！ 姉御!?! 居たの？」

そこに女性軍人、チエキータ大尉が声を掛けた。

「あなた達、帰国の用意はしたの？」

「大丈夫だよ」

「そう、後3時間でお発だから」

「了解」

ニツク少尉は自室の荷物をまとめて居た。

コト

ニツク少尉は2つの写真立てを手に取った。1つは幼い頃の自分と陸軍の制服を来た父親と一緒に撮った写真と、同じく幼い頃の自分と同年位の日本の少女と写った写真だった。

ジー

ニツク少尉は写真立てをバックにしまい、チャックを閉めた。

ブラックタイガーの指揮官ベックウイズ大佐は自室で落胆してた。

彼の部屋にはたくさん勲章と大統領と謁見した写真が飾られていた。

彼の手には作戦で戦死した部下の認識表が納められた箱があった。

コンコン

「入れ」

ガチャ

「失礼します。大佐、ブラックタイガー撤退の用意が出来ました」

「わかった、予定通りの時間に出発する」

「了解」

ブラックタイガーの副官チャップマン少佐が入室し、撤退準備が完了した事を伝えた。

「チャップマン、お前は帰国したらどうする?」

「自分はアトランタの航空会社に就職します。もう家族は引越しを終えて待つてますので」

「そうか」

「では、失礼します」

「何の為に死んだんだ」

「はい？」

「いや、何でもない」

「……………そうですか」

ガチャ

プルルルプルルル

チャップマン少佐が出るのとはほぼ同時にベックウイズ大佐のデスクの電話が鳴った。

ガチャ

「こちらベックウイズ大佐」

『ベックウイズ大佐、モウロンだ』

「モウロン将軍！」

『帰国寸前で悪いが1つ任務を頼めるか？』

「私にとっては任務が第一です』

『簡単な任務だ。南太平洋で新しい島が発見され政府は調査団の派遣を決定した、君の部隊はシンガポールに飛んでもらい、そこから出る調査団の船から島への輸送を頼みたい』

「了解しました」

『では頼むぞ』

「將軍」

『何だ？』

「感謝します」

2人の研究者

島の調査が決定したランダとブルックは中国系女性学者のサシャを交え人選を行っていた。

「古生物学者ではやはり彼の右に出る者は居ないかと？」

「そうだな、それに彼はジャングルにも詳しい。海洋生物の専門家については？」

「それでしたら彼女が適任かと」

アメリカ合衆国

モンタナ州

カチカチカチカチ

シャツシャツシャツシャツ

モンタナ州では新しく発見されたヴェロキラプトルの化石の発掘作業が行われて居た。

「グラント博士！博士にお会いしたいという方が」

発掘チームのリーダー・古生物学者、アラン・グラントは面会希望者が居ると発掘チー

ムのメンバーに教えられ、キャンピングカーに向かった。

「どうもお待たせしました」

「どうも、私はランダと言います。こちらは助手のブルック」

「ブルックです」

「で、今日はどのような？」

「実は南太平洋で新しい島が発見されて、その調査を行う事に成ったんですが、その調査団にあなたをと」

「成る程。その島の地図は？」

「地図はありません、あるのは衛生写真だけ」

「事前調査は？環境の状況、生態系等は？」

「それも含めの調査だ」

「島は更地？それとも森林？」

「衛生写真から密林だと言う事はわかってる」

「……………済まないが他を当たってくれ」

「ちよつと！何で？」

「君達はその島をどのくらい知ってるかは知りませんが、はつきり言つて未開の地を営めてるとしか思えない」

グラント博士はブルック達に未開の地の調査のノウハウが不足してる事を指摘し、危険だと判断しオフアアを断った。

「それは……………」

「グラント博士、あなたの経歴を読みました。あなたはイギリス軍特殊部隊に居たところ
森林戦のエキスパートだったと」

「それが？」

「あなたなら例え未開の地でも冷静に行動し皆を導ける、そう考えました」

「それは買いかぶりだ」

「ところであなた達は資金難に悩んでるそうだな？」

唐突にランダはグラント博士の資金面の話に切り替えた。

実際グラント博士達の発掘チームは発掘資金にかなり苦労しており、発掘作業の継続もままならない状態にある。

「それは「もし参加してくれるなら今後の発掘資金10年分を約束しよう」……………」

ハワイ州

ザパーン

一方ハワイの海では1人の美女が海からボートに揚がった。

ピリリリリピリリリリ

「はいウチキドです」

『ウチキド博士、メグミです。大学にお客様がお見えです』

「わかった、直ぐに戻るわ」

ブロロロロ

ウチキド博士はボートのエンジンをかけ大学に向かった。

ハワイ大学マノア校

ウチキド博士はマノア校の自分の研究室に戻った。

「お待たせしましたウチキドです」

「はじめまして私はサシヤと申し訳ます、この度は突然お邪魔して申し訳ありません」

「いえ、それでご用意は？」

「はい、先日NASAの人工衛星ランドサット8が南太平洋の海域に島を発見したんです、勿論地図には載ってません。それでその島に調査団の派遣が決定したのですがその調査団のメンバーに海洋学の権威のウチキド博士を思いましてオフアーをした次第です」

「成る程、これはお聞きしたいのですが」

「はい」

「島に感染症等の脅威は？」

「……………感染症に関しては用意できる限りの血清や特效薬、駆虫剤を用意します」

「そうですねか……………」

「……………」

「……………わかりました。ですが1つ条件が」

「はい何でしょう？」

「メグミ」

「はい」

ウチキドは助手の日本人女性を呼んだ。

「彼女はメグミ、私の助手です」

「メグミです」

「今回の調査には彼女の同行も認めただけでないでしょうか？」

「博士良いんですか！」

「ええ」

「わかりました、上司には私に伝えておきます」

サシヤはウチキド博士の研究室を出た。

(しかし本当にあの人40代後半?とてもじゃないけどそうは見えないわ)

再会の2組

シンガポール共和国

シンガポール港

「たくー！ やつと帰れると思ったのに！ ジャングルの次はまたジャングルだぞー！ ふざけるなー！」

シンガポールに到着したブラックタイガーはへりを貨物船デュープブルー号に搭載した。

その際ミルズ一等准尉は悪態をついて居た。

「仕方ないわよミルズ」

「でもよ姉御！ これは無いぜ！」

「でも簡単な任務だし」

「おいミルズ、騒いでもどうしよも無いだろ」

「コールお前は何とも思わないのかよ」

「そうだな。 思う事があるとしたら、この武器かな？」

「コールもそう思うか？」

「ニック」

彼らの会話に入って来たのはニック少尉だった。

「そうね、ただの輸送にガンシップを使う必要は無いわね」

チエキータ大尉とコール大尉とニック少尉はヘリや装備品に異常な程武器が多い事が気になってた。

一方テンガロンハットを被ったグラント博士もデーパーブルー号に乗船し艦載された武装したMH-60Lを見ていた

「とても調査とは思えないのは私だけかな？」

その頃、NASAのランドサットのメンバーステイプは船の入口で乗船者のチエックを行ってた。

「ハワイ大学のカティア・ウチキド、それと助手のメグミ」

ウチキド博士とメグミはステイプに乗船許可書を見せた。

「ああ確認した。タラップはあっちだ」

「どうも」

二人はステイプに言われて方に行きタラップを見つけた。

「待て、乗船許可書はあるか？」

「ハワイ大学海洋学のウチキドです、こちらは助手のメグミです」

ウチキド博士とメグミはベックウイズ大佐に乗船許可書を見せた。

「よし、俺は今回へり輸送を行うブラックタイガーの指揮官ベックウイズだ」

「軍が輸送を行うんですか？」

メグミは軍隊が関わってる事に疑問を持った。

「ああ何か問題が？」

「いえ、ただ珍しいなって」

「正直言つて俺も学術的調査に加わるのは今回が初めてだ」

二人はディープブルー号に乗船し艦載されて居たへりを見た。

「武装へり……ですね」

「ええ、調査に必要かしら？」

「確かに」

「？」

ウチキドは甲板に居たグラント博士を見つけた。

「アラン？」

「?カティア」

「元気そうね」

「ああ、君こそ」

「博士、お知り合いですか?」

「ええ彼は古生物学者のアラングラントよ」

「どうも」

「はじめまして、助手のメグミです」

「あなたも呼ばれたのね?」

「ああ君もか」

「ええ……このへり、あなたも気になった?」

「ああ、調査に軍が来るのは良いとする。軍のへりじゃないと行けない所の可能性もある、だが」

「この武器の量?」

「ああ、さつきランダにこの武器の量を聞いた」

「そしたら?」

「フィリピンで作戦を行ってた部隊をそのまま回して来たからだそうだ」

「？」

ヘリの子エックをしてたニック少尉はヘリを見てたグラント博士達に気付いた。

「気になりますか？」

「ああ、君は軍の人間か？」

「ええ、第第17統合作戦部隊のニック・モートン陸軍少尉です」

ニック少尉は敬礼をしてグラント博士達に身分を名乗った。

「……………ニック？」

「え？……………メグミ？」

ニック少尉はメグミを見て、彼女が幼なじみの彼女だと気付いた。

「嘘、本当にニックなの！」

「ああ、久しぶりだな」

「メグミ、彼を知ってるの？」

「はい、私の幼なじみです」

「俺の親父も軍人で、日本の基地に勤務してた関係で俺も日本に住んでたんです」

「成る程」

「おじさんは元氣？」

「……………親父は死んだ」

「え？いつ？」

「俺が日本を離れて直ぐ、イラク戦争で」

「そう………だったの」

「おい！ニツク！」

「ああ今行く！じゃこれで」

ニツクはスリフコに呼ばれてその場を去った。

「じゃ私も行きましょうか？」

「はい」

「じゃあアラン、後で」

「ああ」

「随分親しそうでしたね？」

「え？」

「博士、グラント博士の事アランって呼んでましたよね？かと言うグラント博士も博士の事力ティアと呼んで居た。お二人はかなり親しい仲間なんじゃないんです？」

「………よくわかったね流石よメグミ。そう彼と私は以前付き合ってた」

「そうなんですか？」

「でもまあ、お互い仕事が多すぎて自然解消しちゃったけどね」

到着

「何世紀の間、海上の貿易ルートを避けた続けた島をNASAのランドサットが発見した。島の周囲は常に低気圧に囲まれており、船での接近は困難だ」

ランドサットの一員で、調査団のリーダーのニエベスはブリーフィングで調査の概要を説明していた。

「以降この島へはベックウイズ大佐率いるブラックタイガーのヘリで向かい調査を行う。更に今回資源調査団も同行する、団長のランダと同行の生物学者サシャと地質学者ブルックだ。島の地表及び地質を調査する予定だ、それと古生物学者のグラント博士と海洋生物学者のウチキド博士にも参加してもらった。では次に調査の手順についてブルックから」

ニエベスに替わり、ブルックが壇上に上がった

「手短にやります。まず爆発性の装置を使用して振動を起こし島の地盤を調査します。南側の海岸からサイズミックを順次投下、これで地層の密度を調べます」

「爆弾を落とすの?」

「いや科学機器です」

ウチキド博士の質問にブルックはサイズミックをあくまでも科学機器だと説明した。「なあ聞いた？俺達科学者だつてさ」

ミルズ一等准尉は冗談を言いそれにグラント博士が乗った。

「良いのか？学者は金に困るぞ」

「この人調査に参加したらお金あげるつて言われて来たのよ」

「……………ハハハハ……………」

ウチキド博士がグラント博士が来た理由を暴露し場の雰囲気緩和した。

「島に上陸後ベースキャンプを設置する。それについてはブラックタイガーのチャップマン少佐から説明を」

ブルックの次はチャップマン少佐が壇上上がった。

「皆良いか？嵐の影響でおそらくディープブルー号とは交信が出来ない、自力で対応してくれ。3日後に島の北端で補給ヘリと合流する、死にたくなければこの機会を絶対逃すな、肝に命じてくれ」

ブリーフィングが終了し、グラント博士はサイズミックや弾薬が積まれた保管庫に来た。

「……………」

「何してるんです?」

そこに見回りに来たニック少尉が話し掛けた。

「これは全て爆弾か?」

「調査用のサイズミックです」

「君、本当にそれ信じてるのか?」

「……………これは少尉ではなく、ニック・モートンとして話します。正直に言うとは信じてません。俺は学術的調査の事は何も知りませけどこの量は異常だと言うのはわかります。ハンドガンやライフルは護身用、爆薬は障害撤去、それならわかります。でも電動ガードリングガンに対戦車ミサイルまで用意してるのはおかしいと思います。まるで何かに備えてる、そんな感じがします」

「そうか。ところで君の上官のベックウイズ大佐、彼根っからの軍人だろ?」

「ええ、陸軍士官学校を首席で卒業し入隊。湾岸、イラク、アフガニスタンにも出兵し指揮も完璧、勲章も授与された英雄。参謀本部の座に居てもおかしくないのに現場に拘ってる……………そう言えば、グラント博士はSASの大尉だったと聞きました。何故古生物学者に?」

「元々古生物には興味があつたんだ。子供の時は恐竜の玩具を集めて、よく図鑑を読んだもんだ。ある作戦中に私は偶然恐竜の化石を見つけたんだ、その時思つたんだよ。」

昔、今自分達が立つてるこの地に人間よりも大きい生物が君臨した、その世界を見てみたいとね。それで軍を除隊し、古生物学者の道にシフトチェンジしたんだ」

「成る程」

翌朝

調査団の面々は甲板で各々過ごしてた。

「写真いいかしら？」

「おう、カッコよく撮ってくれ」

メグミは趣味でもあるカメラで写真を撮影してた。

「何書いてるんだ？」

ミルズ二等准尉は座って何かをやっていたチャップマン少佐に訪ねた。

「息子に手紙」

チャップマン少佐が書いていたのは、息子ビリーに充てた手紙だった。

「親愛なるビリーへ、誕生日には帰ると言ったが、パパは嘘を吐いた、ダメなパパだ。この手紙で許してくれ」ってのはどうだ？」

「短過ぎだろ」

それぞれ島まで各々楽しく過ごしていると、島を囲う嵐が見えて来た。

操舵室

「思ってたより酷いな」

操舵室ではランダ、ニエベス、ベックウイズ大佐、チャップマン少佐、ディープブルー号船長が話会って居た。

「長年船乗りをやってるがこんな嵐は初めてだ」

「これでは突入は無理だ、調査は延期しよう」

ニエベスは調査の延期を進言した。

「島までの距離は？」

「約50マイルと言った所だね」

ベックウイズ大佐は船長に距離を聞き船長は答えた。

「もう少し接近できるか？」

「これ以上は無理だ」

「嵐を突破できるか？」

「ここだ。気圧のポケットだ、ここを突破しよう」

「意気込みは立派だが責任者として言わせてもらおう、今回の調査は中止だ中止」

ニエベスはランダに調査中止を言い渡した。

「ランドサットの勇氣ある決断をNASSAも喜ぶでしょう」

「いや勇氣でない、良識的決断だ」

「地図にもない島を見つけたのに雨天延期だつて？あなたは残ればいい次の調査は何年後になるか」

ランダは調査を続行しようとした。

「ベックウイズ大佐、例え嵐でも君のヘリ部隊なら突破可能だと聞いた。ここはベックウイズ大佐の判断に委ねよう」

ランダは判断をベックウイズ大佐に委ね、ベックウイズ大佐は嵐を見た。

「私は絶対にヘリには乗らないぞ」

「……………」

ニエバスは甲板に駐機してゐる自分が乗るMH-60Lの前に居た。

結局彼も行く事になった。

ランダとブルックもヘリに乗ろうとしてた。

「ヘリを武装させた理由を知らせなくて良いですか？」

「どうして教える必要がある？不安にさせるだけだ。なに武装は念のためだ」

ランダはブルツクの肩を叩き自分の乗るコール大尉とミルズ一等准尉が操縦するヘリに向かった。

ブルツクもサシヤとニエバスとステイブと同じヘリに乗った。

『出発まで後2分、調査団はヘリに搭乗せよ』

「一体何をやらせるきだ?」

「俺達の隊長だ、信じろよ」

ミルズ兵曹長は不安があったが、コール大尉はベックウイズ大佐を信じていれば大丈夫だと言った。

「普通自分の家のベッドが恋しいだろ?恋しくないのか?」

「……………」

「……………持っていないのか?」

「後で合流しようチャップマン」

「了解です」

チャップマン少佐はディープブルー号の後部に艦載されてるCH-53Eに乗り込むべく後部甲板に向かった。

「よし、固定しろ」

前部甲板に艦載されたCH-47Fには、補給用の燃料や移動に使うLSSVが搭載された。

グラント博士とウチキド博士とメグミはニック少尉と同じへりに乗った。

「よろしく」

「ああ」

「グラント博士、ウチキド博士。私はこの機の操縦士を務めますチエキータ、彼は副操縦士スリフコよ」

「どうも」

「バッテリー」

「チエック」

「ジエネレータ」

「チエックチエック」

「エンジンスタート」

「チェック3回よし」

キュイイイイ

コール大尉の乗るヘリがエンジンをスタートさせMH-60Lのメインローターとテールローターが回転を初めてた。

他のMH-60L、CH-47F、CH-53Eのローターも回転し始めた。

キュイイイイ

シュツシュツシュツシュツシュツ

ババババババババババババババババ!!!!

全機ローターの回転をあげ発艦の用意が出来た。

『こちらFOXリーダー、準備は良いか? さあショーの始まりだ今日もビシツと決めるぞ! 慌てるな、いつも通りだ、ガンとケツをくいしばれ!』

ベックウイズ大佐はいつもよりテンションが上がった。

ババババババババババババババババ!!!!

『全機に次ぐ、発進準備完了。発進せよ』

管制官が発艦許可を出し、甲板要員がgoサインを出しヘリが発艦を始めた。

「しっかり踏ん張れ！」

「わかったわ！」

ブロロロロロロロロロロ！！！！

ガタンガタン

キイキイキイ！

ヘリの計器が警告ランプを発した。

「FOXリーダーから全機へ、管制航法に切り替えろ。イカロスの話を思い出せ、イカロスの父はイカロスに蠟の翼を授けた、太陽には近付くなど警告して、だが大喜びのイカロスは何処まで空高く飛んで行き、太陽に近付き過ぎ蠟の翼は溶けて落ち、死んだ。だがアメリカ陸軍は父のような無責任ではない、我々の翼は高熱で鍛えに鍛えた！決して溶けないアメリカ製だ！」

ブロロロロロロロロ！！！！

ベックウイズ大佐の通信が終わると同士にヘリは嵐を突破した。

嵐の中の島は、周囲の嵐が嘘のように晴れて、穏やかな天気だった。

「綺麗な島だな」

チャップマン少佐は島の様子に率直な感想を述べた。

ブロロロロロロ!!!

「よし、全機高度を下げる」

ブロロロロロロ!!!

「ハハ」

カシヤツ

メグミは少し浮かれながらカメラで写真を撮った。

カチ

—————♪—————♪—————♪—————♪

ヘリの一機がスピーカーで音楽をかけた。

「こちらFOXリーダー、それぞれ調査ゾーンへ展開しろ、FOX7調査団を下ろせ」
ベックウイズ大佐の指示でブルック達に乗ったFOX7は降下した。

『了解FOX3、6ゾーンへ向かいます』

「あそこに下ろしてくれ」

島の動物達は見たことないへりに驚いて逃げ初めた

「よしサイズミック投下準備」

『了解』

ニエバスが無線機でサイズミックを用意させた

『よし、投下しろ』

ベックウイズ大佐が投下命令を出し一機がサイズミックを投げ落とした

シャキ！

ブンブンブンブンブン

サイズミックがある程度落ちると後部のプロペラが展開し回転しながら落ちて行つた

ガン！

ドーン！！！！

サイズミックが地面に突き刺さると爆発した

ブルック達の機材にデータが送られて来た

「おい見てるか？」

「こんな反応するなんて、信じられない」

シャキ！

ブンブンブンブンブン

ガン！

ドローン！！！！

ブロロロロロロ！！！！

「……………」

次々とサイズミックは投下され島のあちこちで爆発が起きた、時に動物を吹き飛ばしながら、ウチキド博士はそれを複雑な顔で見た

「ランダ、聞いて驚くなよ？ 基盤岩だ、この下は空洞になってる」

ブルックは無線機でランダに調査の結果わかった事を伝えた

ドーーーーン
ドーーーーン
!!!!!!!

サイズミツクで次々と爆発が起きてるのをFOX3に乗った兵士は楽しそうに見てた

「!?危ない!!」

ジャキン!!!

ヒュユユユユ!!

ヘリのコパイロットが叫ぶと黄色い光線がMH-60Lの機体が切断されヘリは墜落した。

「!?」

ガン!!!!

ウーーーー!ウーーーー!ウーーーー!ウーーーー!

隣を飛んで居たヘリが何かにつつかりコントロールを失った。

「メーデーメーデー!FOX4操縦不能墜落する!FOX4操縦不能墜落する!」

「あああああ!!!」

ステイブはコンピューターが計測データを弾き出すまで間食のサンドイッチを食べた。

『FOX3とFOX4がやられた！FOX3、4応答せよ！』

無線機からヘリが撃墜されたとベックウイズ大佐から通信が入った。

『こちらFOX6、前方に障害物を発見！』

『FOX5、こちらも補足した！』

ヘリから次々と障害物を見つけたと無線が飛び交った。

『あれは何だ!?!』

『どうなってるんだ!?!』

同時に混乱した無線も飛び交った。

全員が生物を見て目を疑った。

「何だ？あれは」

「大きい亀？」

チエキータ大尉の呟いた通り、現れた障害物は体長80メートルの二足歩行の亀だっ

た。

全滅

「大きい亀？」

チエキータ大尉は目の前に現れた巨体な亀を見てそう呟いた。

「3時方向から飛翔体！数はおよそ6！」

ニツク少尉はヘリの左側から接近する飛翔体に気付いた。

「鳥？鳥の群れだ！」

「でも、何あの大きさ」

メグミが言った通り6羽の鳥の群れが来たが、その鳥は体長が約10メートル近くはあった。

ギヤアアアアア!!!

鳥は亀の周りをホバリングした。

『全機攻撃用意！』

ベックウイズ大佐はヘリを墜したのがあの鳥と亀だと気付き、全機に攻撃用意をさせ、ヘリの乗員達は搭載した銃を用意した。

『FOX2、攻撃準備完了！』

『FOX 7、攻撃準備完了!』

「FOX 6、攻撃準備完了!何時でも行けます!」

「全機攻撃準備完了!」

「発砲を許可する!攻撃開始!撃て!」

ダダダダダダダダダダダダ

ダダダダダダダダダダダダ

ダダダダダダダダダダダダ

ダダダダダダダダダダダダ

ウインザー—————!!!

ザ—————!!!
ヘリが搭載したM240、M134、GAU-19で亀と鳥に攻撃を開始した。

「何なんだあれ!?!」

「わかるか!」

ダダダダダダダダダダダダ!!!

ブロロロロロロロロ!!!

ビーーーー

ジャキン!!

ヒューズドン!!!!

MH-60Lが鳥が吐き出した光線で機体を切断され墜落した。

ブロロロロロ!!!!

ザーーーーー!!!!

「離れろ! 離れるんだ!」

「あんたの指図は受けない!」

「チツ何処が簡単な任務よ!」

グラント博士はへり離れるよう言ったがスリフコが一蹴した。

チェキータ大尉は舌打ちしながら悪態を吐いた。

「いいから離れるんだ!」

ガン!!!

ランダが言った直後、隣を飛んでたCH-53Eが亀の腕とぶつかりテールローターが破壊された。

「こちらFOX12！操縦不能墜落する！墜落する！」

チャップマン少佐が操縦するCH-53Eはコントロールを失い墜落して行った。

「FOX5！東にFOX9が墜落した救出しろ！」

ブ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
!!!

シ
ュ
ー
ー

「こちらFOX5、今隊員を下ろしました」

コール大尉は救出を開始した事を伝えた。

降下した隊員は墜落したヘリのパイロットを外に出した。

グ
シ
ャ
！

バ
サ
ッ
！

だが鳥の一羽が救助隊員とパイロットを捕食した。

「おい嘘だろ!?!」

ド
ン
!!!

ニック少尉はヘリからバレットM107で狙撃を続けた。

バサツバサツバサツバサツ

ニツク少尉は、パイロットと救助隊員を捕食し飛び立ったばかりの鳥に狙いを定めた。

「翼だ！翼を狙え！」

「了解！」

ニツク少尉はグラント博士に言われバレットM107の照準を鳥の翼に合わせた。

ドン!!!

ブシユツ！

ドン!!!

ブシユツ！

ドン!!!

ブシユツ！

ドン!!!

ブシユツ！

キヤアアアアア……

ドシャ!!!

鳥は翼を撃ち抜かれ飛行不能になり墜落した。

ニック少尉はスコープで鳥の首に狙いを付けた。

ドン!!!

バシユツ!!

ギャツ!!!

50口径弾は鳥の首に命中し大量に出血した。

ドン!!!

バシユツ!!

ドン!!!

バシユツ!!

そして間髪入れず鳥の口内に2発目を撃ち込み止めを射した。

「ナイスショット!」

「こちらFOX6! ニックが飛行型生物の一体を射殺!」

『了解。ニックよくやった!』

ブロロロロロロ!!!

「奴らは倒せる。あの化け物を撃ち殺せ!」

「死ね化け物!」

「はあはあはあ」

グシャ!!

下でも亀と鳥の戦闘に巻き込まれ、ヘリは二機共に破壊され。

ランドサットのスタップもニエバスとステイプを除き、捕食または踏み潰され、残ったのはブルック、サシャ、ニエバス、ステイプ、ブラックタイガー隊員1名だけだった

ザッ

彼らは機材の陰に隠れた。

「逃げろ!!」

ゴゴゴゴゴゴゴ!

ブルックは亀の尻尾が迫ってるのに気付き、ブルック達は逃げたがブラックタイガーの隊

員は逃げ遅れた。

ガッ!!

「ああああああああ……!!」

隊員は尻尾で弾き飛ばされた。

「旋回してもう一度攻撃を」

「危ない!!」

「!?!」

ガン!

「きゃっ!」

先程弾き飛ばされた隊員がグラント博士達の乗るヘリのキャノピーにぶつかり、メグミは悲鳴を上げた。

ズルズル

グシャグシャ!

ぶつかった隊員はヘリの吸気口に吸い込まれた。

ビービービービービー!

「エンジンが故障!エンジンが故障!」

「こちらFOX6操縦不能!墜落する!墜落する!」

「衝撃に備えろ!」

ヒューーバキバキバキバキ!!

グラント博士達の乗るヘリも墜落した。

『隊長機がやられた！ベックウイズ大佐！無事ですか!？』

「レニス無事か!？」

「無事です大佐」

ベックウイズ大佐は機体から脱出し、コックピットのパイロットの容態を見たがパイロットの1人は既に死亡してた。

「大佐……」

「ホーン！」

ベックウイズ大佐は木の上に引つ掛かってたもう1人のパイロットを見つけた。

彼はヘリが墜落した際に機体から放り出され、木に引つ掛かっていたが、怪我が酷かった。

「大佐………助けて………」

「待つてろ！今助けてやる！」

ベックウイズ大佐はパイロットを救出しようと走り出した。

バキグシャ!!!

「ぐおー！」

だがパイロットが引つ掛かってた木が亀に踏み潰され、ベックウイズ大佐は衝撃で吹き飛ばされた。

「……………っ！」

ガアアアアアアアアアア
!!!!

バン!!!

ギアアアアアアアアアア
!!!!

ドン!!!

亀は飛んで来た鳥の一羽を叩き落とした。

ギアアアアアア……………

叩き落とされた鳥は胸の部分にヘリの残骸が突き刺さり絶命した。

「おいー！これヤバいぞー！」

「危ないー！」

ビーー!!!

ランダが言った直後、コール大尉達の乗るヘリのテールが鳥の光線で切断された。

ビービービービー！

「おいミルズ答えろ！」

「何だよコール！」

CH―47とMH―60は正面から衝突し、CH―47に満載された燃料が引火し両機は爆発大破した。

「全員無事!?!」

「ああ」

「来るわ!」

ウチキド博士は鳥の一羽が接近するのに気付いた。

ギヤアアアアア

キイイイイイン

「ぐっ!」

「何この音!?!」

鳥の口に光が集まると、耳をつんざくような高音がしグラント博士達は耳を防いだ。

パキン!

パキン!

パキン!

高音で、ヘリのキャノピーや腕時計がひび割れた。

ギヤアアアアア

!!!!

亀は手足頭尻尾を甲羅にしまい、甲羅だけになった亀は空に浮き上がった。

キュウウウウウウ!!!!

亀は高速で回転し、そのまま鳥が飛んで言った方へ飛んで行った。

それをベックウイズ大佐は憎しみの目で見っていた。

尋問

グラント博士達はヘリから脱出し、ブルック、サシヤ、ニエバスと合流した。

「どうやらヘリは全滅したようだな」

「スリフコ、無線は？」

「ダメだ姉御、誰も出ない」

スリフコ一等准尉は無線機で交信を試みたが、誰とも繋がらなかった。

「となると、北端へ行つて3日後の補給ヘリと合流するしかなさそうだな」

「ここから西に河があります。ひとまずそこに行きましょう」

「そうだな」

「？」

皆が出発の準備している初め、メグミはふと足元を見ると足下に何か落ちてるのに気が付き拾った。

（勾玉？）

彼女が拾ったのは日本に古来から伝わる装身具、勾玉に似た物だった。

（鉄……とはちよつと肌触りが違うわね。そもそも何で南太平洋の島に？）

メグミは勾玉を触って調べてたら、突然オレンジに発光した。

「え？今熱を……」

「メグミ！行くぞ！」

「え？うん！今行く！」

メグミは拾った勾玉を上着のポケットに入れ、彼女らは西に向かって移動を開始した。

カチャ

一方、撃墜されたCH-53に搭乗してたチャップマン少佐はシートベルトを外して他の乗員の容態を見たが、全員死亡していた。

彼はヘリから出て無線で交信を試みた。

「こちらFOX12、誰か聞こえるか？」

ザー

「……こちらFOX12、誰か聞こえたら答えてくれ」

ザー

『こちらFOXリーダー、ベックウイズだ』

「ベックウイズ大佐！チャップマンです！」

チャップマン少佐の無線にベックウイズ大佐が答えた。

『チャップマンか、無事か?』

「自分は無事です、ですが他の者は……」

『そうか……今何処に居る?』

「ここは島の西側4キロの山。座標は6—4—2—0—1—7—5、こちらの搭乗機はスーパースタリオン」

「よしわかった、今からそっちに向かう。あの亀野郎を倒すにはスタリオンの武器が必要だ。お前は周囲を偵察して奴を待ち伏せられる場所を探してくれ」

『了………て………しま………』

「チャップマンどうした?よく聞こえない」

突然無線が途切れ始めた

『た………聞こえ………』

「チャップマン!」

ザー………

無線からは雑音しか聞こえなくなった。

「………おいレニス!いつまでもそうやって黄昏てる気か?」

「いえ、今行きます」

ベックウイズ大佐とレニス二等軍曹はチャップマン少佐と合流すべく歩き出した。

「大佐！ベックウイズ大佐！」

ザーーーーー

チャップマン少佐の無線機からも雑音しか聞こえなくなった。

「こちらチャップマン、周囲の偵察を開始する」

カチャ

カチャン！

チャップマン少佐はM4A1等の装備を持ち偵察に出た。

その頃、川原にはミルズ一等准尉やコール大尉、ステイブ、その他生き残ったブラックタイガーの隊員6人が居た。

カパ

コール大尉は岩の上に座り、レーションの缶詰を開け食事をしてた。

「……おいコール！お前よくこんな時に飯なんて食えるな！」

「ああ、腹がへったからな」

ミルズ二等准尉は少しイラつきながら言ったが、コール大尉は飄々と返した。

「お前状況をわかってるのか!?俺達高層ビル位の亀とバカデカイ鳥にやられたんだぞ
!」

「ああ……ありや普通じゃないな。ああ言うのカイジユウつて言うだろうな」

「………あいつつて冷静なのか頭おかしいのかよくわからねえな」

「おい!お前達!」

声が出た方を見るとブーニーハットを被ったベックウイズ大佐とレニス二等軍曹が居た。

「大佐!無事で!」

「お前達も無事だったか」

「レニスよく生きてたな」

「ああ」

ベックウイズ大佐達は合流し再会を喜んだ。

「生存者は?」

「7人です。カーターもウイルズもシュタイヤーもスミスも皆死にました………姉御とスリフコとニックは不明です」

ジャラ

ミルズ一等准尉は状況をベックウイズ大佐に報告すると、ニツク少尉、チェキータ大尉、スリフコ一等准尉以外の死亡したブラックタイガー隊員のドックタグを全て手渡した。

「……………グラント博士達は？」

「グラント博士及びウチキド博士、それにブルック、サシャ、ニエバス、メグミつて日本人の女の子もチェキータ達と同じく不明。ステイプは今俺達と一緒に」

「……………ランダは何処だ？」

ランダは土手の倒木に座ってた。

そこにベックウイズ大佐が歩み寄った。

「大丈夫か？」

「ああ……………部下は残念だったな」

「ああ」

カチャ

ベックウイズ大佐は隣の倒木に座ると、シオルダーホルスターからロングスライドのハードボーラーをランダに向けた。

「……………」

「さあ、正直に話んだ」

ベックウイズ大佐はランダを尋問し始めた。

「……………怪物が居る」

「そのようだな」

「駆逐艦ジェイソンを知ってるか？」

「知らない」

「1954年、私はその水兵だった。ビキニ環礁実験における放射能汚染を測定していた時に船は突然沈んだ、生存者は私だけだった。政府は事故で沈没したと言ったが私は見た、巨大な影を、この世界には我々が知らない存在が居る、未確認巨大陸生生命体 MOUITだ。それから私はそいつらを探した、そして見つけた」

「つまりお前達はあの亀や鳥の事を知ってたんだな？」

「ああ、だが奴らの力は強大だ、今の戦力では太刀打ち出来ない。騎兵隊を呼ぶんだ」
ランダへの尋問が終わり、ベックウイズ大佐はハードボラーをしまい立ち上がった。

「俺が騎兵隊だ」

襲い掛かる島

ザツ

ベックウイズ大佐達は死亡した隊員達を埋葬してM4カービンを刺し、死亡した隊員のヘルメットと認識票の1枚ずつかけた。

「本国の墓地に埋葬してやりたいが、許してくれ。だがお前達の敵は取る、いや取らねばならない、必ず」

ベックウイズ大佐は死んだ部下達に別れの言葉を言った。

その頃、グラント博士達も河を目指して行動を開始した。

軍人の3人以外にもグラント博士、ウチキド博士、サシャもM4カービンを、ブルツクはM870ショットガンを護身用に所持してた。

軍人3人は被り物をヘルメットからニック少尉はパトロールキャップ、チエキータ大尉は黒いベレー帽、スリフコー等准尉はバンドナに替えて居た。

「大学で地球空洞説の論文を書いた、それでランダに雇われた」

「ランダはそこが別世界に通じてると信じてるの」

ブルックとサシャもランダの本当の目的を話た。彼らは暫く歩くと湿地帯に出た。

「こちらFOX6、誰か応答してくれ」

ザーーーーーー

「こちらFOX6、誰か聞いてるか？」

ザーーーーーー

「スリフコ、あまりバッテリーを使わない方が良いわ」

スリフコ一等准尉は何度か無線交信を試みたが、チエキータ大尉に止められた。

ザパーーン!!!

「「「「「「!!」」」」」」

カチャカチャカチャカチャ

突然、直ぐ横の沼にあつた腐木が動き、グラント博士、ニック少尉、チエキータ大尉、スリフコ一等准尉は銃を向けた。

ザーーーーーー

腐木だと思つてたのは巨大な水牛だつた。

「……………全員銃を下ろせ。奴に敵意は無い」

グラント博士は水牛に敵意が無いと感じるとニック少尉とチエキータ大尉も感じ取

り銃を下ろした。

カチャ

だがスリフコ一等准尉はM203が装着されたM4カービンを構えたままだった。

「スリフコ下ろして」

「やらないと殺られる！」

カチャカチャカチャ

スリフコ一等准尉は先程の恐怖から銃を下げなかった。

そしてよく見ると彼の銃は震えて居た。

「スリフコ………銃を下げるんだ」

カチャ

グラント博士はスリフコ一等准尉のM4カービンに手を添え、ゆっくり下げさせた。

ザーーーーー

そして水牛はそのまま彼らに何かをする事なく立ち去った。

ドサツ ドサツ

「？」

水牛を見送った直後、サシャは後ろから近付く足音に気付き振り返った。

ガアアアアア！

「きゃつー！」

「なっ！何だこいつ！」

サシャの悲鳴で全員が振り返ると彼らの後ろからオレンジ色の表皮に口に2本の牙、鼻に2本、頭に短めの角が生えた2メートル程の四足歩行生物が2匹近付いて来た。

ガアアアアア！

ビシユン！

「伏せろー！」

生物の1匹が鼻の角の先から針のような物を打ち出した。

「撃てー！」

ダン!!!ダン!!!ダン!!!

ドン!!!

攻撃されたグラント博士達は生物を敵と認識し、持っていた銃で反撃を開始した。

カン！カン！カン！

撃った弾は生物に命中していたが、生物の頭蓋骨の方が硬いのか、弾は弾かれていた。

ガアアアアア!!

「くそー！どんだけ硬てえんだよー！」

ダン!!!ダン!!!ダン!!!

「俺が奴らの気を引く」

「ニツク危険だ！」

「……っ！」

ダン!!! ダン!!! ダン!!!

ダッ

ダン!!! ダン!!! ダン!!!

ニツク少尉はグラント博士の忠告を無視し、生物の前に出ると横に走り出し、生物達はニツク少尉に気をとられた

カチャ

ボン!

ドン!!!

ニツク少尉に気がそれた隙にチェキータ大尉がMGL-140を撃ち、HE弾は生物の手に着弾し爆発した。

グルルガアアアア!!

「こいつら本当に生き物なの!?!」

しかし、生物は爆発を至近距離で受けたにも関わらずまだ生きており、チェキータ大尉に威嚇までして来た。

ダン!!!ダン!!!ダン!!!

カチン!

ニツク少尉の使っていたM4カービンが弾切れをおこした。

「このー!」

ブン!

ガン!

ニツク少尉は八つ当たりも込めてM4カービンを生物の1匹に投げつけた。

ガアアアアアア!!

ドシツ!ドシツ!ドシツ!

M4カービンをぶつけられた生物の1匹は、怒ってニツク少尉を追いかけた。

「ニツクー!」

ブン!

ガチャ

それを見たチエキータ大尉はMGL-140をニツク少尉に投げ渡し、ニツク少尉はキヤツチし近くにあった倒木と倒木の間を飛び込んだ。

ガアアアアアア!!

ガッ!

ボン！

生物は倒木の間顔に突っ込もうとし、ニツク少尉はその生物の口に直接銃口を突っ込み、弾を撃ち込んだ。

ガッ！

ブン！

生物は口につつまれたMGL-140を遠くに投げ捨て、その隙にニツク少尉は倒木から出た。

ガアアアアア！

生物は逃げたニツク少尉に飛び掛かろうとジャンプした。

バシヤツ！！

ジャンプした途端に体内に撃ち込まれたHE弾が爆発し、生物は血や内臓をばらまきながら地面に墜ちた。

ズルツ

「ぬあー！」

ズシヤ！

走って逃げていたニツク少尉は地面に墜ちた生物の内臓を踏み、滑倒した。

カチャ

ダン!!!ダン!!!ダン!!!

ニツク少尉は滑倒したまま、墜ちた生物の死体を盾にベレッタM9でもう1匹の生物を銃撃し、全員もう1匹の生物に攻撃を集中した。

「なんとしないと……………」(そう言えば、あの生き物は何でここに来たの?)

メグミは生物がどうして自分達の所に来たのか疑問を持った。

(あいつらが来る前に何があった……………水牛? いや、そのまま追いかけるはず、他には)メグミはスリフコ一等准尉が持っていた、無線機に気付いた。

(もしかして!)「スリフコ! その無線機点けて!」

「はあ!? 何言ってるんだよ! こんな時に!」

「いいから!!」

「わかったよ!」

カチ

メグミに怒鳴られ、スリフコ一等准尉は無線機を点けた。

「出力を全開にして!」

キュインキュイン

ガアアアア!!ガアアアアア!!

無線機の出力を上げた途端に生物は苦しみ出した。

「やっぱり」

「え？何がだよ？」

「きつとあの生き物は低周波が弱点なのよ。だから直前まで無線機を使つてた私達を襲いに来たのよ、発生源を潰す為に」

ガアアアアアアア　　アアアア

無線機の低周波を聞き続けた生物はそのまま絶命した。

「……………いったいこの島はどうなってるんだ？」

「……………」

カチャ

ダン!!!

ニツク少尉は死んだ生物の死体に、一応止めとして銃弾を撃ち込んだ。

ガサガサガサガサ

その頃、ベックウイズ大佐達はチャップマン少佐と合流するべく、島の西を目指して竹林を歩いていてた。

「大佐、チャップマンからの連絡は？」

「いや、あれつきりだ」

装備はベックウイズ大佐はM14、レニス二等軍曹はM249、コール大尉はAK47、それ以外隊員とステイブはM4を装備してた。

「気を付けろ、またあのカイジユウどもが来るかもしれない」

「ああ……なあ、そのカイジユウってなんだ？」

ミルズ一等准尉はコール大尉が度々口にしてるカイジユウの単語の意味を聞いた。

「日本語でモンスターって意味だ」

「それ誰から聞いた？」

「ゴジラだ、ガキの頃よく見てた」

カチ

「ふう………?」

最後尾を歩いて居た兵士は水筒の水を飲んだ際に頭上の何かに気付いた。

ガッ!

「!!」

ポト

兵士は水筒を地面に落とした。

落とした音でベックウイズ大佐達は後ろを見ると。

「?????????」

蜘蛛の口から触手が降りて来て、触手はミルズ一等准尉に絡み付き彼を持ち上げた。

「くそー！」

カチャ

コール大尉はAK—47を構えたが、丁度射線上にミルズ一等准尉が被ってしまった。

「駄目だミルズに当たる！」

「くそー！くそー！」

ザクザク

ミルズ一等准尉は触手をナイフで切り始めた。

ガサガサ

「！脚だ！脚を斬れ！」

ベックウイズ大佐は蜘蛛を支えてる脚に気付き、脚を斬るよう言った。

シャキン

「っ！」

ガッ！

ガッ！

ガッ！

コール大尉達はナイフで蜘蛛の脚を切断し始めた。

「！」

ガチツガチツガチツ

ザクザクザクザク

ミルズ一等准尉は蜘蛛の口に迫ってる事に気付き、急いでナイフで切り始めた。

「！」

ガツ！

「ぬお！でい！」

ガツ！

レニス二等軍曹は危うく脚で刺されそうになったが、寸前で回避しナイフで脚を切断した。

ギイイイイイ！！

ザクザクザクザク

ブチ！

「あああああ！！」

ドサツ！

蜘蛛は脚を斬られてバランスを崩したのと同時にミルズ一等准尉はナイフで触手を

ダン!!!ダン!!!ダン!!!ダン!!!
ギイイイイイイ………

ベックウイズ大佐はハードボラーの45ACP弾を蜘蛛の顔面に撃ち込み止めを射した。

湖畔の死闘

パシヤ

周囲を偵察中に湖畔に出たチャップマン少佐は顔を洗った。

ザパン!!

「!」

すると突如波の音がし、チャップマン少佐は近くの腐木に隠れた。

ザパーパーパーン!!!!

隠れた直後、湖に巨大亀が現れた。

「!」

ガアアアアアアア……

ザパーパーン!!!!

シユルルル!!!!

ガアアアアアアア!!!

亀に湖から出た巨大な触手が巻き付いた。

そして湖から頭が花の様に開いた巨大イカが巨大亀に襲いかかった。

ガアアアアアアアアアア
!!!!

ザパーパーン!!!

カーパーパー!!!

イカは亀を絞め殺そうと絡み付く。

ガアアアアアアアアアア
!!!!

ドん!!!ザパーパーパーン!!!

亀はイカをおもいつきり踏みつけた。

カーパーパー!!!

ガアアアアアアアアアア
!!!!

ガッ!ブチブチ!!

カーパーパー!!!

亀はイカの触手を噛み切り、イカは悲鳴を上げた。

カーパーパー!!!

ガアアアアアアアアアア
!!!!

ブン!!

ザパーパーン!!!!

ガッ!

ザパーーーーン

ザパーーーーン

亀はイカを何度も叩きつけたり踏みつけたりした。

ガアアアアアアア

ザパーーーーン

カアーーー

亀はイカの触手を振りほどき距離を取った。

カアーーー

イカは開いた頭を閉じた。

カアーーー

ガアアアアアアア

イカは閉じた頭を亀の腹に突き刺しそう飛び掛かったが、刺さる寸前で亀がイカを

キヤツチした。

ガアアアアアア

ガツ！

ブン！

ザッパーーー

ザパン
ザパン
ザパン
!!!!!!

亀はそのまま去って行き、チャップマン少佐はそれを見送った。

「……………まさか……………敵じゃないのか？」

ガサガサガサガサ

「サシャ」

「ん？何？」

ジャングルを進んでたチエキータ大尉は突然サシャを呼び止めた。

「ちよつとね」

シャキン

チエキータ大尉はサバイバルナイフを抜いた。

「え？ちよつと何の真似よ？」

シユッ

ギン！

「！」

チエキータ大尉はサシャの顔ギリギリかすめ、ナイフを後ろの木に刺した。

「な!？」

シャキン

チエキータ大尉がナイフを抜くと、タランチュラが串刺しになったた。

「あなた、そのまま居たら噛まれたわよ？」

「……………あ、ありがとう」

「止まれ」

先頭を歩いて居たグラント博士は何かを見つけて全員を止まらせた。

「これは……………」

彼らが見つけたのは石造りの柱と石像だった。

「明らかに人口物だな」

「この島には昔人が住んでたのかしら？」

「だろうな、それも文明を持った」

メグミは見つけた人口物を撮影しようとかメラを構えた。

「？」

カメラのレンズ越しに何かに気付いた。

ガサ

「きゃー！」

「「「「「?!」」」」」

メグミは突然現れた人に驚き悲鳴を上げた。

周りからも続々と槍を持ったアフリカの民族のような格好をした人間達がぞろぞろと出て来て取り囲まれた。

「居たじゃなくて、居るの間違いだわ!」

「まずい! 囲まれた!」

カチャ

「止まれ!! 撃つぞ!!」

「来るな!!」

カチャカチャカチャ

取り囲まれ事により彼らも持って居た銃を構えた。

「止せ! 撃つな! 撃つな!!」

グラント博士は撃ちそうになったニック少尉達を止めた。

グラント博士達は完全囲まれ一足即発になったが。

「あー待て! ダメダメ!」

そこに、英語を話す初老のパイロットジャケットを着た男が現れた。

「そんな物騒な物しまえって。ああ大丈夫、大丈夫だ、彼らは敵じゃない」

男に言われて島の島民達も武器を納め、グラント博士達も銃を下ろした。

「ハハまさかこの日が来ようとは、まるで夢みたいだハハハ……………これは現実だ……………キリアコフが居たらどんなに喜んだか……………」

「あんたは？」

スリフコー等准尉は男に身元を聞いた。

「おっと、これは失礼、合衆国海軍第93攻撃飛行隊のハンク・マーロウ中尉だ」

ガメラ

グラント博士達はマーロウに島民達の村落に連れて来られた。

「彼らはイーウイス族、この島に古くから住む民族だ。彼らは言葉を話さない、必要ないからだ」

「コミュニケーションはどうやってるんだ？」

「目を見れば解る」

「心が通じ合ってるんだな」

「ああそうだ。ここは島の中で最も安全な場所だ、奴らも入って来ない」

「あの壁は？」

ウチキド博士はマーロウに巨大な木で出来た壁の事を聞いた。

「あれは侵入を防ぐ為だ」

「あの亀の事か？」

「いや違う、まあそれも含めて追々話そう、こつちだ」

マーロウは難破したのか大量の廃船が集まった一角に案内し、その中の『海竜丸』と

漢字で書かれた船に入った。

「帽子を取ってくれ、ここはイーウイス族にとって最も神聖な場所なんだ」

そう言うのとマールロウはハンチング帽を取った。

それに習って、グラント博士はテンガロンハットを、ニツク少尉はパトロールキャツプを、チェキータ大尉はベレー帽を外した

「久しぶりに見た」

「何を？」

「帽子取ったあなたの顔」

「ハハそうか」

「博士、あんたらそういう中か？」

「昔は」

マールロウ達は海竜丸の中央に位置する空間に来た。

そこにはイーウイス族の何人か居て、所々に絵が書かれた石が置いてあった。

「あの絵はイーウイス族の歴史だ。この島にはおかしな奴らがウジャウジャ居る。イーウイス族は奴らに襲われ住みかを奪われ続けた、そこにイーウイス族が神と崇める存在が現れた」

一行は一番大きく書かれた亀の絵を見た。

「それがガメラだ。ガメラはこの島いや、この星の守護神だ」

「でもあなたの友達はその神様が……」

ウチキド博士はマーロウの友人をガメラが殺したと考えたが、マーロウはそれを否定した。

「いや、ガメラじゃない、奴らだ」

マーロウが指差した絵には鳥の絵が書かれてた。

「あれは？」

「あれはギャオスだ」

「あれが、あんたの友達を？」

「そうだ、ガメラとギャオスは俺達が産まれる何千年も前から間争ってた、いわば奴らはお互いに敵と見てる」

「だから戦ってたのか」

「マーロウ、この絵は？」

グラント博士はガメラの横に書かれた人魂のような絵を聞いた。

「オタマジャクシか？」

「いや、勾玉じゃないか？」

「マガタマってなんだ？」

もないのに」

「これは……メグミって言ったか？」

「はい……」

「お前はガメラの巫女に選ばれたんだ」

「私が……巫女？」

その頃ベックウイズ大佐達は湿原を進んでた。

スツ

先頭でポイントマンについていたベックウイズ大佐が止まれのサイン出し後続は止まった。

カチャ

ベックウイズ大佐はM14を構えスコープを覗き、約50メートル先に居る、ノコギリザメの顔をしたカラス位の大きさの鳥が居た。

「ふん、ブサイクな鳥だぜ」

ベックウイズ大佐はそう吐き捨てると。

カチャ

ダン!!!

「マールロウ、3日後に島の北部にヘリが来る。君もアメリカに帰ろう」
グラント博士はマールロウと一緒に来るよう誘った。

「……………ハハ、ヘリが？」

「ああ」

「ハハ、ハハハハハ」

「ハハハハハハハハ」

「無理だ」

「ハハ……………」

「3日じゃとてもじゃないがたどり着けない」

マールロウから3日じゃ無理だと言われメグミ達は絶望した。

「無理か？」

「ああ……………歩いてはな」

ギャオス

島のとある場所で水牛が死んでた。

キヤアアアア

水牛を鳥、ギャオス2体が捕食してた。

大きさは先程の倍の25メートルになってた。

ドン!!!!

ガアアアアアアア

そこにガメラが来た。

ガアアアアアアア

キヤアアアア

二方共に威嚇の声を上げた。

ギャアアアアア

ドン!!!

ガッ

ガアアアアアアア

ガメラの後ろからに別のギャオス飛び付いた。

ギャアアアア

ビーーーーーー!!!!!!

バシユウ!!

ガアアアアアアアア!!!!

ギャオスは光線、超音波メスでガメラの首を切り、血が噴き出しガメラは悲鳴を上げ倒れ、ギャオス達はガメラにまとわりつきガメラの肉を啄み始めた。

ガアアアアア

ガツ

ガメラは立ち上がりギャオスは離れた。

ガアアアアアアアア!!!!

ドン!!!!

ギャアアアアア

ドーーーーー!!!!

ガメラは火球を撃ちギャオスの一体を打ち落とす。

ギャアアアア!!!!ギャアアアア!!!!

ギャオスは即死は免れたが体は燃えており、翼も焼け落ち、焼け死ぬのは時間の問題

だった。

ギヤアアアア!!!!

残り2羽のギャオスは撤退した。

ガアアアアア

ドン!!!!

ドン!!!!

ガメラは燃えて居るギャオスに歩み寄った。

ギヤアアアア!!!!

ガアアアアア ガアアアアアアアアア!!!!

ドン!!!!

ドーーーーーン!!!!

ガメラは燃えて居るギャオスに止めの火球を撃ち込みギャオスを爆殺した。

「後一步で脱出つてとこでキリアコフは喰われちゃった」

マールロウが連れて来たのは村落の近くの河で、そこには船があった。

船はA―7やY a k―38以外にもB―29やP―51、零戦等の飛行機を集めて作られた、俗に言うホバークラフトだった。

「だがこいつはエンジンがかからない、手伝ってくれるか？」

一行はマーロウが作成したホバークラフト、グレイフォックスの整備に取り掛かった。

「廃船から使えそうなバッテリー持ってきた」

「スリフコ、行けそうか？」

「家は整備工だ！出来なきや勘当されちまう！」

「じゃあソ連はもう無いのか？」

「ええ、今はロシア連邦に成ってるわ、因みにドイツは統合された」

カシヤツ カシヤツカシヤツ

メグミはカメラでイーウイス族の写真を撮ってた。

「？」

メグミは壁に人が通れる程の隙間を見つけ、壁の外に出てみると、壁の外側は鋭利になった木の槍が出ており、かなりの量の血痕がこびり着いてた。

ブモオー

「！」

大きな鳴き声があると巨大水牛が墜落したへりの残骸の下敷きになってた。

「う、うううう」

メグミはヘリの残骸を退かして水牛を助けようとしたが、女性一人の力だけではうんともすんとも言わなかった。

（お願い、誰か）

メグミは心の中で助けを求めた。

その時、ポケットの中の勾玉がオレンジ色に輝いた。

ガシヤ

するとヘリの残骸が突然浮き上がった。

「ガメラ……」

ヘリの残骸を持ち上げたのはガメラだった。

ガシヤン!!

ガメラはヘリの残骸を投げ捨てると水牛はその場から去った。

ガアアアアアア

ドン!

ドン!

ドン!

ガメラはメグミを見るとそのまま立ち去った。

「見ろ！」

ベックウイズ大佐はある物を見つけて指差した。

全員がその方向を見るとガメラの緑色の血が岩肌にくっつきとこびり着いてた。

「奴の傷は深い、必ず倒すぞ！」

ベックウイズ大佐は部下に渴を入れると再び歩き出した。

「脅威的だな」

カシャツ

ランダはガメラの血が着いた岩肌をカメラで撮影した、そんな彼にコール大尉が話かけた。

「どうして俺だけM4じゃないと思う？」

コール大尉は自分の小銃がアメリカ軍制式採用のM4カービンではなく、旧ソ連製のAK-47か聞いた。

「このAK、元々は東南アジアのゲリラが持ってた物だ。奴ら俺達が居座る前までは銃なんて見たことなかったってさ……本当は敵なんて居ないのかもな、俺達が探さなければ」

コール大尉は自分なりの戦場論はランダに話した。

「もし敵が現れたら?」

「この銃があるさ」

「……………だと良いな」

ガッ

偵察をしてたチャップマン少佐は、林の中の手頃な木にナイフを刺し、柄にビリーへの手紙と水筒を掛け、手頃な倒木に腰を下ろした。

「はあ……………ビリーへ、人生とは試練の連続だ」

チャップマン少佐はビリー宛てに呟いた。

ガサ!

「!?」

ガサーー!ー!

「何!?!」

ダツ!

ガサ!

チャップマン少佐が座ってた倒木が突然動き出し、チャップマン少佐は倒木から飛び降りた。

キキキキ

チャップマン少佐が倒木だと思ったのは表皮が木のようになつてた巨大なナナフシだった。

チャップマン少佐は地面に落ちてるM4カービンに気付いた。

「……………」

ダッ！

カチャ

チャップマン少佐は駆け出しM4カービンを拾った。

ダン!!!ダン!!!ダン!!!ダン!!!ダン!!!

ナナフシにM4カービンを発砲したが効果は薄かった。

キキキキ

ドシ ドシ ドシ ドシ

ナナフシはチャップマン少佐に反撃することもなくそのまま林の中へ去つて行つた。

「……………悪い事したな、済まない」

キヤアアア

「!」

突然後ろから何か獣の鳴き声がし、チャップマン少佐は嫌な予感がし、後ろを見た。

グ ギ
シ ヤ
ヤ オ
ツ オ
!! オ
!!! オ
!!!!

島の夜

夜になり、グラント博士達は廃船の中で夜を過ごした。

カチャ

メグミはニツク少尉と共に、星空をカメラで撮影していた。

「不思議だな」

「何が？」

「あの星空みたいに危険な所程美しい物だ」

「……………人が手を出して無い〓有りのまま姿が見えるじゃないかしら」

「成る程」

「……………ねえニツク、あなたどうして軍隊に？やっぱりおじさんの影響？」

「だろうな、多分俺も親父と同じで戦争に取りつかれたのかもな」

「どう言う事？」

「実は親父は一回軍を除隊してたんだ」

「え？そうだったの？」

「ああ、でも一般生活に馴染めなくて再入隊した、親父は戦場に居る事を選んだんだ

……メグミ……親父はイラク戦争で死んだって言っただろ？」

「ええ」

「何で死んだと思う？」

「戦死……じゃないの？」

「確かに戦死だ……でも敵と交戦したからじゃない、同じ米軍の誤爆で死んだんだ」

「え？」

「親父はアメリカに殺されたんだ……でも俺はその国の兵士に成ってる……親父みたく、戦いに憑りつかれたのかもな」

「……ねえニツク、おじさんは戦場に居て楽しいって言った事はある？」

「無い、むしろ戦争は嫌だ、無い方が良くとも言ってた」

「じゃああなたは？」

「無い、一応俺も親父の考えは正しいと思ってる、楽しいなんて考える奴は異常と云ってもいい。けど一度戦場を経験すると一般生活がおかしく見える事がある、それは確かだ」

「でも、楽しいって感じが無いなら、あなたとおじさんは戦争に取りつかれ無い、私はそう思うわ」

「あれ？」

「どうした？カティア」

「ランプの火が消えちゃって、油は入れたんだけどライターが点かなくて」

「ああ、じゃあこれ使うか？」

グラント博士はウチキド博士にオイルライターを渡した

「ありがとう」

カチン ジツ

ウチキド博士はランプに火を点け、グラント博士のオイルライターをまじまじと見た。

「これ、私があげたやつよね？」

「ああ、でもタバコはもう辞めたがな」

「それでも持ってきてくれたんだ」

「……………君からのプレゼントだからな」

「交代だ」

「ああ」

ベックウイズ大佐達は野営をし、交代で火の番と見張りをしてた。

「大佐、本当に奴を倒す気か？」

ランダはベックウイズ大佐に改めてガメラ抹殺を目論んでるのか聞いた。

「ああ、奴は俺の部下を何人も殺した。これは俺と奴の戦争だ」

「戦争か………本当にそう思ってるのか？」

「どう言う意味だ？」

「いや、何だか私には君が戦いに取り付かれてるような気がするだ」

「………俺は部下の敵を取りたいだけだ。日の出と共に行動を開始する、今のように休んでおけ」

クチャクチャクチャクチャ

ギヤオスの一体が密林の中で肉を引き裂くような音と共に蠢いて居た。

クチャクチャクチャクチャクチャクチャクチャ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ギヤオオオオオオオオ!!!

ギヤオスはみるみると大きくなり、あつという間に80メートルクラスに成長した。

合流

翌朝

マールロウ達はシャシユカが突き立てある墓の前に居た

「……………こいつはキリアコフ、ソ連の軍人だ。俺とこいつは空中戦の末この島に墜ちた、最初こそ殺し会ったが、何時しか友となり島を出ようと約束してた。当時は資本主義と共産主義は敵だと言われてたが、本当の友情には国家も、主義も、言葉も、肌の色も関係ないと言う事をこいつは教えてくれた……………島を出よう」

シャキン

マールロウはキリアコフの形見のシャシユカを腰の鞆に納めた

ギユルルルル

ギユルルルルブロロン！

「やったー成功だー」

グレイフオックスのエンジンがかかり出航の準備ができた

「……………」

マールロウは集まったイーウイス族に別れを告げた

「世話になったな……………ミズーリに来たら是非寄ってくれ」

ブロロロロロ

グラント博士達はグレイフォックスで島の北端を目指し河を昇り始めた。

そして河を昇り始めてから約4時間程が経った。

マールロウは自分の妻の写真を出して妻の事を語り出した。

「俺の女房だ。最後に会ったのは40年前だ、俺が着任して直ぐ来た手紙で子供が産まれたって連絡があった、男の子だそうだ」

「息子さんには一度も？」

「ああ、話した事も無い……………もうその子も大人だ、結婚して子供が居てもおかしくない……………妻も他の男と再婚してるかも……………でも元気で居てくれればそれで良い……………」

ザー……

『こちらFOX5、誰か聞こえるか？』

『こちらFOX6聞こえるぞ！』

『スリフコ？スリフコか!?!』

「ああそうだ」

スリフコ二等准尉の無線機にミルズ一等准尉の無線が入った。

『今どこに居る?』

「今船で河を北上してる」

『船があるのか?』

「ああ船と言うか飛行機船だな、そっちの現在位置は?」

『ベックウイズだ、今信号弾を打ち上げる』

ベックウイズ大佐が無線に出ると河の北の方で信号弾が打ち上げられた。

「確認した、こちらから北へ約6キロ」

「了解した、ではその河岸で落ち合おう」

『了解!』

「よし出発だ!スリフコ達と合流する!」

ベックウイズ大佐達は河岸に向け出発した。

「やったぜ!」

ベックウイズ大佐達とコンタクトが取れ、グラント博士達に安堵の笑みが浮かんだ。

「ハハ、やった」

ガッ！

「あああああ!!」

ブウウウウ！

「「「「「?!」」」」」」

「ニエベス！」

ニエベスが突如現れた車1台分の大きさのヘビトンボに拐われた。

「撃ち落とせ！」

カチャカチャ

グラント博士とニック少尉はヘビトンボを狙撃しようとライフルを構え照準を合わ

せようとした。

ガッ

ブシャー

「あ、あ、あ、あ!!」

だが撃つ前にニエベスは喉元を噛みきられ、大量の血が噴き出した。

「「「「「……」」」」」

ニエベスの死は誰が見ても明らかだった。

「行くこう」

グラント博士達はベックウイズ大佐達との合流地点に到着したが、ベックウイズ大佐達はまだ到着してなかった。

「遅いな」

「……………まさか」

「やめなさい」

ガサガサガサ

草むらが揺れ音がした方を見た。

そこからベックウイズ大佐達が現れた。

「大佐！」

「お前達、よく生きてた」

「スリフコ！無事だったか！」

「姉御！」

「よおニツク！」

「死んじまったかと思ったぜ！」

軍人の面々は再会を喜んだ。

「ランダ、あなたが正しかった」

「ああ最悪な形になったが」

「これで全員か？」

「ああ、ご覧の通りさ」

「こつちも1人殺られた」

グラント博士とベックウイズ大佐はそれぞれ被害を報告した。

「大佐」

「誰だ？お前は」

「アメリカ海軍第93攻撃飛行隊のハンク　マーロウ中尉、40年前にこの島に不時着しました」

「まさか冷戦の時からここに？」

「ええ、ミレニアムを逃しました」

「そうか、ご苦労だった中尉」

ベックウイズ大佐とマーロウはお互いに敬礼した。

「彼の船なら補給部隊の到着に間に合う」

「そうか、だがその前に部下を救出する」

「他にも生存者が？」

「ああチャップマンだ、島の西に居る」

「西だつて？やめておけ、あそこは危険だ」

マーロウがチャップマン少佐救出を止めた。

「何故？」

「島の西にはギヤオスが住み着いてる」

「ギヤオス？」

「私達が最初に遭遇したあの鳥だ、因みにあの亀はガメラと言うそうだ」

「そうか、だがそのギヤオスとやらが居るにしろ居ないにしろ、チャップマンを放つては置けない」

ベックウイズ大佐はチャップマン少佐救出を強行した。

ギャオス襲撃

グラント博士達はベックウイズ大佐達と合流しチャップマン少佐を救出すべくマーロウの反対を押しきって島の西に来た。

「恐竜の……骨?」

彼らが到着したのは草木の生えない窪地に恐竜らしき生物だった骨が飛散し、黄色いガスで覆われた所だった。

「古生物学者として、調べてみたいんじゃない?」

「今はそんな気になれない」

ウチキド博士はグラント博士をちやかすように言ったが、当の本人はそこまで非常識ではなかった。

カチ

「つ……はあー」

そんな中コール大尉はタバコを吹かしてた。

「コール、吸ってる場合?」

「わかったよ」

チェキータ大尉に注意されコール大尉はタバコを捨てた。
その捨てたタバコは偶然にも地面に開いた穴に落ちた。

ドーン!!!

タバコが落ちた穴が爆発した。

「ガスだ！気を付けろ！」

「可燃性ガスが充満してるのね」

「大佐、中毒症状の危険があります。なるべく早く抜けた方が良いかと」

「わかった。ニツク、念のためサーマルゴーグルを用意しておけ。この霧の濃さでは視界が効かない可能性がある」

「了解」

キヤアアアアア

「ギャオスだ！走れ！」

ギャオスの鳴き声が聞こえて全員骨の影に隠れた。

ズン　ズン　ズン　ズン

霧の中からギャオスが現れた。

「1日であんなに大きく……」

「成長速度が早すぎる」

ギャオスは30メートル強あり、サシャとメグミはたった一晩で最初の3倍になってる事に驚いた。

ガツ ガツ ガアアアア

するとギャオスは口を開け苦しいそうにした。

ガツ

「……………っう」

「静かに」

ギャオスの口からあたりには広がった強烈な酸性の匂いにミルズ一等准尉は吐きそうになった。

キヤアアアアア

ベチャツ

ギャオスは口からペレットを吐き出した。

「!」

グラント博士とウチキド博士はそのペレットに巻き付いて居たドックタグに気付いた。

そのドックタグには J Chapman と彫られてた。

キヤアアアアア

ズン　ズン　ズン　ズン

ギャオスはペレットを吐き出すと霧の中に消えた。

「行くぞ」

ベックウイズ大佐は前進を命じ全員警戒をしながら霧の中を進んだ。

カシヤツ

ビツ

ランダのカメラが誤作動をおこしフラッシュが出た。

キヤアアアアア

「……………しまった」

グシヤ!

ダダダダダダダ!!!

「「「「「!!」」」」」」」

「ランダ!!」

グシヤグシヤ

フラッシュに気付いたギャオスがランダを頭から捕食し、スリフコー等准尉が乱射したM4の銃声に気付き全員が後ろを向いたが、既にランダは捕食されてた。

ダダダダダダ!!!

「うああああああ!!」

ダダダダダダ!!!

ダダダダダダ!!!

ドン!!!カシャン

ギャオスに向け全員が発砲した。

ギャアアアア!!!!

ズン ズンズンズン

ギャオスは再び霧に消えた。

「また来るぞ!」

「キャリバー!」

ガン

ジャラ

カシャン!

ベックウイズ大佐の指示でブラックタイガーの機銃手が恐竜の頭蓋骨の上にM2重機関銃をセツトした。

キャアアアア

霧の中からギャオスの鳴き声があるが霧が濃く姿は見えなかった。

マローウはギリギリで避けシャシユカでギャオスの脚を伐りつけた。

「走れ!!」

だがギャオスはお構い無しにグラント博士達に向かって来て、全員がその場から離れた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!

機銃手がM2重機関銃を発砲した。

ギヤアアアアアアアア

だがギャオスはそれにも構わず突っ込んで来た。

ガン!!

「ああああああ!!」

ガッ

ギャオスは恐竜の頭蓋骨を体当たりで破壊し、機銃手は弾き飛ばされ、そのままギャオスに捕食された。

「カティア逃げろ!!」

ギャオスは次にウチキド博士に狙いを付け彼女は逃げた。

ギヤアアアア!!!

ギャオスはウチキド博士を追った。

ダダダダダダ!!!

ダダダダダダダダダダダダダダ!!!

ダダダダダダダダダダダダダ!!!

その間にも他の者はギャオスを銃撃した。

ザザザザ!

ウチキド博士は恐竜の胸骨の中にスライディングした。

「ああー!」

ガッ!ガッ!

ギャオスはそれでもしつこくウチキド博士を狙った。

「火炎放射器だ!焼き殺せ!」

ゴオオオオオオオオオオオ!!

ベックウイズ大佐は火炎放射兵に命令し、隊員はギャオスに火炎を浴びせた。

ギャアアアア!!!ギャアアア!!!

これにはギャオスも悲鳴を上げた。

「カティア!つちだ!」

その隙にグラント博士がウチキド博士を救出した。

ギャオオオオオオオオ!!!

バツ

「ああああああ!!」

ギャオスは火炎放射兵を翼で弾き飛ばした。

「……………ああああ!!」

ガツ

ドーーーーン!!!!

火炎放射兵は岩にぶつかり燃料タンクに引火し爆発した。

「うわー!」

ドサツ

「っー!」

「スリフコー!」

近くに居たスリフコー等准尉は爆風で吹き飛ばされ頭を打ち付け気絶してしまった。

ジューーーー

スリフコー等准尉が落としたスモークグレネードが火で熱せられた。

「ガスだ!」

ポーーーーン!!!

スモークグレネードが暴発し緑色の煙が上がった。

バサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサ

すると煙に驚いて、骨に営巢してたノコギリザメのような鳥が飛び上がった。

「気を付けろ！そいつらは毒がある！」

ダダダダダダダダ

ダダダダダダダダ

マールウが鳥に毒がある事を伝え、飛んできた鳥を撃ち落とすべく小銃を乱射した。

「ああああ!!」

だが隊員の1人が取り付かれ毒爪で引つ搔かれた。

シャキン！シャキン！

マールウはシャシユカで飛んで来る鳥を斬り落とした。

ダダ!!!ダダダダダ!!!

バサッ

「つがー」

ドサッ

ニツク少尉も鳥を撃ち殺して居たが、背後から来る鳥に気付かず取り付かれた。

「っーくそー！」

カアアア！

ガツガツ

鳥はニツク少尉を啄もうとしニツク少尉はそれを必死で押さえた。

拳銃を抜こうとしたが鳥の力が思ったより強く一瞬も力を抜くことができなかつた。

ガツ！

カアアア！

カチャ

ダダダダダダダダ!!!

メグミがニツク少尉が落としたM4カービンのストックで鳥を殴り倒し、鳥は思わぬ攻撃に突飛ばされ、メグミは鳥を射殺した。

「ありがとう」

「子供の頃、よく助けてくれたよね」

ガツ！

「ああ!!」

ドン!!!

その間にもギヤオスは隊員2人を1人は捕食し、1人は踏み潰した。

「スリフコ! しっかりしろ!」

グラント博士はスリフコ一等准尉を救出した。

ギヤオオオオオオオオオ
!!!!

バツ!

「そつちに行つたぞ!」

「!!」

ギヤオスはグラント博士とスリフコ一等准尉に近付いた。

ギヤオオオオオオオオオ
!!!!

ダツ

カチン!

そこにウチキド博士が駆け付け付けグラント博士のオイルライターを着火しそれを目の前の穴に放りこんだ。

カン ボツ!

ドーーーン!!!!

ギヤアアアアアアアアア
!!!!

「「うあー！」」

ライターの火が穴に充満したガスに引火し、丁度ギャオスが真上に来た時に大爆発を起こし、グラント博士達は爆風で吹き飛ばされた。

キヤアアアアア………キヤアアアアア………

ドサッ

ギャオスは倒れ、そのまま絶命した。

決裂する一行

濃霧の中で襲撃して来たギャオスを撃破したが、ランダを含め多くの犠牲者を出し、残ったのはグラント博士、ウチキド博士、メグミ、ブルツク、サシャ、ベックウイズ大佐、チエキータ大尉、コール大尉、ニツク少尉、スリフコー等准尉、ミルズ一等准尉、レニス二等軍曹、ステイブ、マールウと、島に来た時の半分以下となつてた。

「大丈夫か？」

「ああ」

「ええ」

「皆来てくれ！」

レニス二等軍曹が何かを見つけ皆を呼んだ。

「これは……」

全員が駆け付けると、レニス二等軍曹が見つけたのは、大量のボロボロになつたギャオスの死骸だった。

「ここは奴らの巣だったのか」

「でも、何で死んでるんだ？」

「何かに襲われたとか？」

「ガメラか？」

「いや、ガメラはこんな殺した方はしない」

「じゃあいつたい」

状況から見て別の何かに殺されたのは間違いなかったが襲わった正体が掴めなかった。そしてウチキド博士にはその正体がわかった。

「餌を運ぶ親が居たとは思えない……多分、仲間同士で食い合ったのよ……」

ウチキド博士の推測通り、このギャオス達は餌がなく、雛が互いに食い殺し合ったもので、彼らが今まで遭遇したギャオスは、共食いの末生き残った個体だった。

「……………」

メグミはその酷過ぎる光景から目を反らした。

一向はギャオスの巣から離れ、林に身を隠した。

「大佐、階級はあんたが上だがこの島の事は俺が詳しい、あいつだけじゃない、他にも危険や奴らがごまんと居る。それにあのギャオスはまだ成長途中だ、あれよりもっとデカくなる、そうなったら俺達に勝ち目は無い、退却するんだ!!」

マーロウは危険性と撤退を進言した。

「殺したのはガメラじゃないぞ!？」

「奴は俺の部下を殺した!俺の大事な部下を!!」

ジャラ

ベックウイズ大佐は死亡した部下のドックタグの束を出し訴えた。

「待て!ガメラはギャオスの唯一の天敵だ!」

「ガメラが死ねば、ギャオスがうじゃうじゃと繁殖するぞ!」

「ならそいつらも殺すまでだ!まず手始めに奴を殺す!」

「そんな事はさせない!」

シャキン!

「ふん!」

ガッ

「ぐっ!」

カチャ

マールロウはベックウイズ大佐を止めようとシャシユカを抜いたが、ベックウイズ大佐に制圧された。

「これは戦争だ!!負ける訳には行かない!!」

「これは戦争じゃないぞ!？」

「そうよ間違つてる！」

カチャ

「もとはと言えばお前達のせいで部下が死んだんだ！」

ベックウイズ大佐はついにブルックとサシャにまで銃口を向けた。

「待て大佐、こうしよう。君達はヘリを探しに行け、私達は船に行く、どうだ？」

グラント博士はベックウイズ大佐らガメラ抹殺派とグラント博士ら脱出派に別れる事を提案した。

「……………行くぞ、チャップマン達の敵を取る」

ベックウイズ大佐は歩き出し、それに軍人のコール大尉、ミルズ一等准尉、レニス二等軍曹、チェキータ大尉、スリフコー等准尉、ニック少尉が行った。

「ステイプ、お前は どうする？自分で決める」

「……………もう置いてきぼりは嫌だ」

ステイプはベックウイズ大佐達と行動を共にする事にし、彼らについて行った。

「ニック……………」

「……………」

ジャラ

「え？」

「……………持っててくれ」

ニツク少尉はメグミに自分の認識票を手渡し、彼女はそれを受け取った。
「行ってくる」

「ニツク！」

「……………ごめん、やっぱり俺は軍人だ」

ニツク少尉は仲間達と西に向かった。

「……………我々も行こう」

残ったグラント博士、ウチキド博士、メグミ、マーロウ、ブルック、サシヤは島を脱出する為に出発した。

” ビリーへ、家に帰れるよう頑張ってる、強い子になるんだぞ”

ベックウイズ大佐達はヘリを探す道中で、チャップマン少佐が息子ビリー宛に書き上げた手紙を見つけた。

「……………いいか？必ず家族に届けろ」

「ビリーへ、あなたのパパを勇敢だった」

チェキータ大尉はナイフと手紙を回収し、再びヘリを目指して出発した。

美女と怪獣

ガアアアアアア

「「「「「！」「」」」」」

河を目指して歩いていったグラント博士達は遠くから聴こえるガメラの鳴き声が聞いた。

「ここに居ろ、高い場所から河を見つける」

グラント博士は河を探しに高所に向かった。

「待って」

「メグミ！」

グラント博士の後をメグミとそれをウチキド博士が追った。

「姉御、スリフコ」

「何？ニツク」

「……………ガメラって敵だと思っか？」

「……………」

ニツク少尉の質問にチエキータ大尉とスリフコ一等准尉は黙ってしまった。

「少なくともガメラは私達を敵とは見てないと思う。じゃなければギャオスの攻撃から庇ったりしない」

「じゃあ俺達がしようとしてる事って」

「恩を仇で返す事になるかもね」

「見つけぞ！」

ベックウイズ大佐達は墜落したCH-53Eを発見した。

「武器をかき集めろ、サイズミツクもだ、それで奴を誘き出す」

日が暮れ、ベックウイズ大佐達はガメラは攻撃する準備に取り掛かった。

「ミルズ、コール、武器を準備しろ。奴にナパームをくれてやれ」

彼らは沼に燃料を流し、回収したサイズミツクを数本仕掛け、銃器に弾を装填した。

グラント博士達は、辺りを一望出来る崖の上に移動し、周囲の地形を確認した。

「船はあのカーブの所だ」

ガアアアアア

ドン！

ドン！

ドン！

ドン！

河を見つけたグラント博士の前にガメラが現れた。

ガアアアアアア

「！」

メグミが持ってた勾玉が再びオレンジに光った。

「……………」

「メグミ！」

メグミはゆっくりガメラに歩み寄った。

ガアアアアアア

メグミはガメラの顔に手を触れたが、ガメラは嫌そうな顔一つせず、真っ直ぐメグミを見た。

「……………通じ合ってるのか？」

「まさか、あの勾玉のおかげ？」

グラント博士とウチキド博士はメグミとガメラが勾玉通して通じ合ってる事に気付いた。

「有りつたけの爆薬を仕掛ける。ガメラに教えやれ、この世界の支配者は……人間だと」
ベックウイズ大佐達はガメラの周りに有りつたけのサイズミックとプラスチック爆弾を仕掛けた。

「1番セット」「3番セット」「8番セット」

ガサガサガサガサ

グラント博士達はガメラのもとに急いでいた。

「ニック………ニック！」

「！」

爆薬をセットしたニック少尉はメグミに呼ばれた気がし振り向いた。

「ニック離れろ！起爆するぞ！」

「………了解」

ベックウイズ大佐に急かされニック少尉はガメラから距離を取った。

「大佐、本当にやるんですか？」

「無論だ、これで死んだん部下達も報われる」

ベックウイズ大佐は起爆スイッチに手をかけた。

「ベックウイズ！」

カチャ

カチャカチャカチャカチャカチャ

ガメラとベックウイズ大佐達の間にはグラント博士とウチキド博士が割って入り、グラント博士は銃を構えコール大尉達も銃を向けた。

「やめるんだ」

シャキン！

カチャ

「もうお願いはしないで」

ミルズ一等准尉の後ろからマールロウがシャシユカをミルズ一等准尉の首に、拳銃をスリフコー等准尉に突き付けた。

「ニツク！」

「メグミ……………」

「……………もうやめて」

「言う事を聞いてくれ」

「奴はへりを墜とし、部下を殺した」

「ギャオスを止めようとしたんだ、その戦いに私達が首を突っ込んだんだ」

「我々は兵士だ!!身を挺し家族や国家を衛のが務めだ!!国民はこの怪物が存在する事すら知らない!」

「正気じゃない……………起爆スイッチを置くんのだ」

「……………」

カチ

ベックウイズ大佐は起爆スイッチの電源を入れ、それを見たグラント博士もM4カービンの引き金に指を掛けた。

「やめて……………いい加減目を覚まして」

「……………ふざけるな!!お前達!!こいつらを撃ち殺せ!!」

ウチキド博士の説得に逆上したベックウイズ大佐は、ニック少尉達にグラント博士達を射殺しよう命令したが、誰も引き金を引けなかった、彼らも、一番忠誠心の厚いコール大尉ですら、ベックウイズ大佐に着いて行けなくなっていた。

「……………」

「わかってるな?これは間違ってる」

マールウがスリフコ一等准尉を説得するように言った

「……………」

「……………ニック……………」

「……………」(親父……………親父ならどうする?)

13年前

アメリカ合衆国

デラウェア州 ドーバー空軍基地

幼い頃のニックは出兵する父を見送りに来た

「お父さん、悪い奴をやっつけて来て!」

「ニック、悪い奴ってのはな本当は居ないだ」

「?」

「つまり、どっちが敵で、どっちが味方かはその時の状況で変わるんだ、今はわからなくてもそのうちきつと解る。もしどっちが敵かわからないなら、自分の信じる方の味方になれ」

「……………」

カチャ

「置いてください大佐」

ニツク少尉とスリフコ一等准尉は銃をベックウイズ大佐に向けた。

「!」

カチャ

ハードボーラーを抜こうとしたベックウイズ大佐の頭に、チエキータ大尉がベレッタ M9を突き付けた。

「……もうやめましょう」

チエキータ大尉に言われコール大尉、ミルズ一等准尉、レニス二等軍曹も銃を下ろした。

「貴様ら、逃げる気か？この戦争を放棄するのか!!」

「これは戦争じゃない!!それは大佐、あなたが一番わかっているはずよ」

「……………」

「ベックウイズ、もう終わりだ」

バサバサバサバサ!!!

ドン!!

ギヤオオオオオオオオ!!!!

突然、彼らの前に体長80メートルにまで巨大化したギヤオスが飛来した。

「まずい、完全に成長してる」

「退却だ」

ギヤオスの出現にグラント博士達はその場から離れた。

「ベックウイズ！」

「大佐！」

しかしベックウイズ大佐だけはその場から動かなかつた。

「……っ！」

グラント博士とニック少尉は仕方なく彼を置いて退却した。

「……」

ベックウイズ大佐はガメラを見て、再び起爆スイッチの発破ボタンに手を置いた。

「くたばれ、このクソツタレの亀や」

グシャ！

ベックウイズ大佐はガメラに怨み言を言ってる途中で、起爆スイッチごとギヤオスに

捕食された。

ガアアアアアアア

ギヤオオオオオオオ

!!!!!!

「！」

パシヤツパシヤツ

メグミはガメラとギヤオスの鳴き声で立ち止まり、カメラでその様子を撮影した。

ガツ！

バサツ！！

ガアアアア

ガツ！

ガメラとギヤオスは取っ組み合いを初めた。

ギヤオオオオオオ

ガツ！ガツ！ガツ！ガツ！ガツ！ガツ！ガツ！ガツ！

ギヤオスはガメラを足の爪で引っ掻き初めた。

ガアアアアア
！！！！

グツ

ギヤオオオオオオオ
！！！！

ガツ！

ギヤオオオオオオオオオオオオオ
！！！！

ガメラは左肘から爪を出すと、肘の爪でギヤオスの体を切り裂いた。

ギヤオオオオオオオオオ
！！！！

ガメラVSギヤオス

夜が開け朝日が昇り初め、ブルックとサシヤはグレイフォックスでグラント博士達を待っていた。

「戻らなければ先に行けって」

「ああ」

「夜明けよ」

「わかってる！」

「ねえどうするの？」

「……………」

グラント博士達は林を抜け、到着したのは難破船が大量に集まっている場所だった。

「ここは島の外れだ」

ギヤオオオオ!!

「……………」

「行くぞ！奴に追い付かれる！」

「……………」

ガチャ

グラント博士達は湿地に入ったがコール大尉だけは何故かその場に残り、所持してたAK-47を地面に捨てた。

「おいコール！何してるんだ!?!早く来い！」

「……………皆生き残れよ。じゃあな」

「おい……………コール、お前何を」

コール大尉は彼らとは反対方向を向き、来た道に戻ろうとした。

「戻れ！」

「おい！コール！コール！」

ギャオオオオオオオ
!!!!

カチャン

ギャオスが追い付き、コール大尉は手榴弾の安全ピンを抜いた。

「コール！」

「駄目だ！」

「離せ！コール！」

コール大尉が何をしようとしてるか気付いたミルズ一等准尉はコール大尉を連れ戻

そうとしたが、グラント博士とニック少尉に止められた。

コール大尉は手榴弾を持つ手を広げ、ギャオスに歩み寄った。

「ほら、食べよ」

コール大尉は皆を逃がす為にギャオスにわざと捕食され、道連れに自爆を凶ろうとしていた。

ギャオオオオオオオオ!!!

バツ

しかしギャオスはコール大尉を捕食せずに翼で弾き飛ばした。

ドーーーーーン!!!

岩肌に激突したコール大尉は、安全レバーが外れた手榴弾と全ての手榴弾が連鎖爆発し、爆死した。

「行くわよミルズ……………コールの死を無駄にする気?」

「……………行くよ。あいつの分も生きてみせるよ!」

チエキータ大尉に諭されたミルズ一等准尉は走り出した。

「メグミー!信号弾!」

「はい!」

バシユウ!

メグミは空に向け信号弾を撃った。

ギャオオオオオオオオオオオオ

ギャオスはグラント博士達に迫った。

ガアアアアアアアアアアアア

ドン!!!

そこにガメラが現れギャオスを突き飛ばした。

ギャオオオオオオオオオオオオ

ガアアアアアアアアアアアア

ガッ!

ガッ!ガッ!

ガメラとギャオスは再び取っ組み合いを始めた。

ガッ!

ドン!!!

ギャオオオオオオオオオオオオ

しかしガメラは傷が癒えてない為ギャオスに押されてた。

グシヤ!

ガアアアアアアアアアアアア

!!!!

ギヤオスはガメラの傷口を噛みちぎり、ガメラから緑色の血が吹き出した。

「！」

ガシヤン

それを見たニツク少尉はジャベリンを構え、ギヤオスの頭部にロックオンした。

バシユウ！

ドーン！！！！

ギヤオオオオオオオオオオオオオオ

発射された対戦車ミサイルはギヤオスの左目を直撃しギヤオスにかなりの痛手を与

えた。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオ

「ヤバい……」

ガシヤン！

ミサイルの直撃を喰らったギヤオスはニツク少尉を睨み、睨まれたニツク少尉はジャベリンの発射器を投棄し逃げた。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオ

ギヤオスはニツク少尉に襲いかかろうとした。

ババババババババ

ギャオオオオオオオオオ
!!!!

ギャオオスに無数の銃弾が撃ち込まれた。

反対側からサシヤが操舵するグレイフオックスが来て、ブルツクがグレイフオックスの船首に搭載された機関銃でギャオスを攻撃してた

「皆乗って!」

「走れ!」

グラント博士達はグレイフオックスに乗船した。

ガアアアアアア
!!!!

ガッ!

ギャオオオオオオオオオオオ
!!!!

ガメラが再びギャオスに掴みかかった。

ギャオオオオオオオオオオオ
!!!!

バサバサバサバサバサバサ!!

ガアアアアアアアアア

ガッ!

ギャオオオオオオオオオオオ
!!!!

飛び立とうとしたギヤオスの足にガメラが噛みついた。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!

ビーーーーー!!!

ザック!

ギヤオスは超音波メスで自分の足を切り落とし、突然抵抗を失ったガメラは後ろのタンカーに倒れた。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!

ビーーーーー!!!

ギヤオスはガメラの倒れたタンカーに超音波メスを発射し、タンカーと周囲の難破船が爆発し、爆炎はガメラを飲み込んだ。

「ガメラが……………」

グレイフオックスがガメラとギヤオスが戦ってるうちに距離を取り、そこからも爆炎が見えた。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!

地面に降りたギヤオスは勝利を確信したかのような声を上げた。

「……………ニツク」

メグミはニツク少尉の手とガメラの勾玉を握りしめた、すると勾玉はオレンジに光つ

ガメラが一瞬早く火球を発射し、一瞬遅れてギャオスが超音波メスを発射した。
ビシユウ!!ビシユウ!

超音波メスはガメラの頬を掠めた。

ゴーーーーー!!!!

ドーーーーー!!!!

ガメラの火球はギャオスの顔面に直撃し、ギャオスの頭が爆散した。

ドーーーーー!!!!ドガーーーーー!!!!

ギャオスは倒れ、爆発し爆炎が上がった。

ビーーーーー……………

爆炎の中から、超音波メスの光が天に向け伸び、消えていった。

「勝った」

レニス二等軍曹はそれがギャオスの断末魔だと見抜き、ガメラの勝利を確信した。

ガアアアアアアアアアア

ガメラはグラント博士達の方を見た。

ガアアアアアアアアアア

ガアアアアアアアアアア

ガメラが一吠えするとメグミの勾玉から光が消えた。

ザパン!!ザパン!!

ガメラは島の奥へ歩いて行った。

グレイフオックスは河を昇り、島の北端に到着した。

「この船はさ……………アメリカ行きだよな?」

「ああ、勿論さ」

ミルズ一等准尉の不安な疑問にスリフコ一等准尉は答えた。

ジャラツ

「あなたに返すわ」

「ありがとう……………メグミ、ガメラと心通じ合ってたんだって?」

「うん、でももうガメラの心は見えない」

メグミはニツク少尉にドックタグを返した、そしてニツク少尉の質問にメグミはガメラと疎通出来なくなっていると答えた。

「……………なあ、もしギャオスの中にこの島から渡りを行った奴が居るとしたら」

「そう、この世界の何処かにギャオスの卵が在っても不思議じゃあない」

「そして、それが今こうしてる間に孵化してるかもしれない」

グラント博士とマローロウはギャオスの卵が世界中に在り、チエキータ大尉がそれが孵

シカゴの住宅街に1台のタクシーが止まった。

タクシーから海軍の軍服を着用したマーロウが降りた。彼の手には荷物とキリアコフの形見のシャシユカがあった。

マーロウはドアをノックすると40代程の男性と子供が出た。

男性と子供はマーロウの顔に見覚えがなかったが、マーロウはその子供が息子と、その子供だと一目でわかった。

次に家の奥から飲み物が入ったピツチャーを持った女性が出て来た。

マーロウは一目見ただけで、少し老けては居たが間違いなく自分の妻だつとわかった。

妻もマーロウを見た途端に持つて居たピツチャーを床に落とした、彼女も玄関に立つてる男が40年前に行方不明になった夫だと一目で気付いたようだった。

妻は泣きながらマーロウと包容した、そして妻は息子に彼が父親だと伝えた、息子も死んだとずつと思つてた父親が目の前現れた事に驚愕した。

マーロウは初めて会つた息子と握手をし、家の中に入った。

「おい、こつちを見てるんだろ？」

島から帰還して約半月後、グラント博士とウチキド博士そしてメグミはペンタゴンのとある部屋に居た。

彼らが居た部屋は広い空間に事務机と椅子があり、壁一枚程の鏡が張られた取調室を広くしたような部屋だった。

グラント博士は鏡に向け先程の言葉を言った。

彼はその鏡がマジックミラーだと一目で見抜いた。

そしてそのマジックミラーの反対側では、陸軍の制服を着たニック少尉、陸軍参謀総長のモウロン將軍やCIA長官が見ていた。

「これって軟禁だと考えていいのかしら？」

「軍つてのは直ぐにこれだ」

「あの、島の事は誰にも言いません、ですから解放してください」
メグミはネックレスにした勾玉を握りながら訴えた。

ガチャ

「島って何の事かな？」

「ブルック、サシャ」

その部屋にブルックとサシャが入って来た。

彼らは椅子に座り、ブルックとサシャは机に資料を広げ、本題に入った。

「あの島は始まりに過ぎなかったのよ」

「どう言う事だ？」

「脅威は、ギャオスだけじゃなかったんだ」

部屋が暗くなり、プロジェクターでスクリーンに映像が映写された。

グラント博士、ウチキド博士、メグミは映像を見た。

その映像は何処かの遺跡の調査中に発見された壁画で、ギャオス、甲殻類の様な大小の生物、ギャオスに似た頭を持つ触手を生やした生物の壁画が映され、そして最後に映されたのは、それらと対峙するガメラが描かれかけた壁画だった。